

テーマ:卒業後の仕事、労働環境について考える

関連の深いコース:サステイナブル経済・経営コース、ローカル・サステイナビリティコース

1. このテーマを学ぶために

仕事や雇用についての学習は領域融合的であり、既存の様々な分野について学際的に学ぶことが必要とされます。とくに関連が深いものとしては経済学や労働経済学、経営学、社会学（労働社会学）、社会政策、労働法等があります。

ただ、領域融合的な勉強は必ずしも容易ではありません。たとえば法学部で法律を勉強しようと思えば、まず入門としての法学を勉強し、続いて、あるいはそれと並行して憲法を、その後に民法や刑法、家族法などの個別法を、やがて訴訟法へと順に勉強し、知識を積み上げていくことになります。したがって、どの時点、どの段階で、どんな本を読めばよいかについても一定の共通理解があり、とりあえずはそれらの法律名がついた教科書を読むことからスタートすることができます。

ところが、雇用や労働環境のような領域融合的な分野を勉強するには、どこから手をつけたらよいのか、そこで立ち止まってしまうことも往々にしてあります。関係する教科書はあってもきわめて限られているか、ない、ということもしばしばです。そこで、人間環境学部でこれらのことを学ぶとしたら、どのような勉強方法が可能かについて、本学部の開講科目に沿って簡単に示しましょう。

まず、人間環境学部の5つのコースとの関連でいえば、サステイナブル経済・経営コースやローカルサステイナビリティコースが中心になります。一般的な知識として経済、経営、企業、社会、労働法などの知識が必要とされます。なかでも中心となる科目は「労働環境論 I」と「労働環境論 II」で、その他就職や仕事に関連したものとして「キャリア入門」（英語での授業）があります。雇用問題である限り経営学（「現代企業論」）は企業と雇用について学ぶ場合の背景や基本を知るために重要です。なかでもCSR論（「CSR論 II」）は、労働環境に対する企業の社会的責任を考えるとときに最も重要なテーマを扱っています。その他、労働環境を考える場合の法的な枠組みについては、労働法（「労働環境法」）が教えてくれます。また、この分野の勉強にとって労働組合や経営者団体の理解は不可欠ですが、そのためには社会学、とくに社会学、とくに労働社会学や産業社会学の勉強も重要な一部になります（「現代社会論 I・II」）。ここでは貧困や教育、ジェンダー、外国人、家族に関連する広いテーマが扱われ、それらは雇用問題と密接に関係します。また、近年、社会問題化している働く人のメンタルヘルスや過労死、少子・高齢化などの問題を考えるには「衛生・公衆衛生学 III」も多いに役立ちます。

こうした勉強をしていくために、その前提として、雇用や労働環境が環境学一般のなかにもどう位置づけられるかを知ることが必要になります。そのためには必修の「人間環境学への招待」があります。また、これらの分野に関係なく、私のようにオーストラリアの雇用問題を研究していると、英語が不可欠になることは言うまでもありません。

2. テーマに関連した推奨科目

人間環境学への招待	労働環境論 I	労働環境論 II	キャリア入門
労働環境法	現代企業論	現代社会論 I	現代社会論 II
CSR論 II	衛生・公衆衛生学 III		